

## 辻音楽師

視線を弦の上に落とし  
孤独が指を細くしなやかに

地面を見つめたまま  
馬車が埃を上げて傍らを追い抜く

暗い憂愁は音色を沈ませ  
時おり、耐えきれぬように弓なりに高まり

橋を渡り、坂を上り  
春夏にうつむき、秋冬にうつむき

人々は彼の自由を羨み  
彼は自由の重荷にうちひしがれ

投げられる硬貨コインの音にふと怯える

降りしきる雪の中に団樂を夢み  
振り払ってもまといつく冷たい風に震え  
次の街で一生をと儚い希望にしがみつく

(1984.11.24)